

## すもうとわたし（II）

副校長 遠藤 久利

### 去年今年 貫く棒の如きもの

高浜 虚子

俳人、虚子の数多くの作品の中で、わたしの大好きな句のひとつです。たとえ、去年から今年へと時が流れようと、わたしの思いは一本の棒のように決して変わることはない、と勝手に解釈している自分です。毎年、年の初めにこの句を心の中で唱えながら己を省み、棒が折れていないか、もしかしたら棒がなくなってしまっていないかどうか問うているわたしです。

さて、暁の太陽が眩しかった元旦から早いもので、2008年も、もうひと月が経ってしまいました。1月の23日には、横浜でも初雪が見られ、わずかに舞い散る雪の醸し出すシーンとした静かな風情に心が癒されたのはわたしだけではなかったでしょう。あいにく、途中から雨に変わり、しっとりとした銀世界が瞬く間に消えてしまったのは誠に口惜しく残念でなりませんでした。

またまた相撲の話になりますが、昨年（2007年）の11月に関東甲信越の教頭会がわたしのふるさと、茨城県水戸市で行われた時のことでした。研究会が終わったら、母校の相撲場を訪ねてみようと思っただけで、出かける前から心を躍らせ、楽しみにしていました。高校卒業後、訪れるのは初めてのことで、ワクワクしながらも緊張しながら校門をくぐり道場に目をやると、三十数年前と少々趣は異なっていましたが、確かに道場はそこにありました。が、道場には鍵がかかり人の気配が全く感じられませんでした。呆然としながらも事務室を訪ね、かつての顧問の先生にお会いしてお話をさせていただきました。3年前に、ただ一人の部員が卒業し、以来入部者”0”。大会に助っ人で出てもらったこともあったボクシング部も柔道部もレスリング部も部員は”0”とのこと。ご無理を申し上げて、鍵を開けていただき土俵にあがりました。三十数年前のことが、頭の中をよぎるとともに主のいない土俵はとても寂しく感じたものでした。まさに『時代の流れ』をしみじみと感じながら母校を後にしたわたしでした。

ところで、2008年、初場所は、朝青龍の復帰で初日から満員御礼となり、千秋楽は白鵬と朝青龍の両横綱の相星決戦で大いに盛り上がりました。『東の横綱として、絶対に優勝したかった。それを果たすことができ嬉しい』という白鵬のコメントの中に彼の一生懸命さが感じられ、この横綱はしっかり貫く棒を持っておられるのだなと感激しました。一方で、他の力士の不甲斐なさが目立ったことはとても残念でした。大関といえば、8連敗の千代大海、やっとの勝ち越しで衰えを隠しきれない魁皇、大関昇進の頃の勢いが全く感じられない琴欧州・琴光喜。若手力士の台頭もまだまだ先のような感じです。『ゴルフ界のはにかみ王子のような時代の流れを変える、ニューヒーローよ、相撲界にも出現せよ。稀勢の里がんばれ！！』青春時代を相撲一筋で過ごした相撲好きのファンとして相撲の復活を願ってやみません。